

『ブラチスラバからやってきた！ 世界の絵本パレード』展

関連ボランティア企画



絵本にみる世界と日本

私たちボランティアにとって、展示室での多くの作品との出会いは毎回ワクワクドキドキ心ときめく時間です。

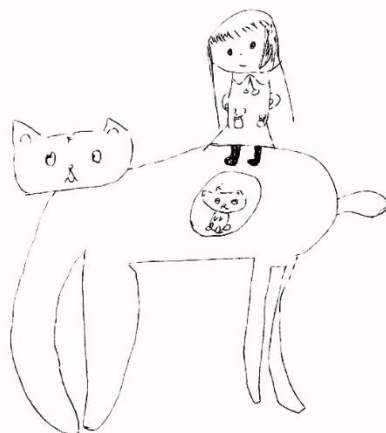
今回は、世界各国の絵本原画の中からお気に入りの作品をご紹介します。

[第1部 BIB 2023 受賞作品 8階]

👑 グランプリ IMAGINATION

No.1 - 1 問いかけの本 パロマ・バルディビア

「何に怒って火山は火をはくの？」「海の真ん中はどこ？」 — 問いかけは、哲学的で「答え」がないものばかり。でも、遊び心があり好奇心をくすぐられる。絵本のもとになったのが、チリの外交官で、国民的詩人、ノーベル文学賞受賞者でもあるパブロ・ネルーダの詩集というのが興味深い。絵本の完成に6年を要したという。思考の迷路にはまり、複雑なイラストになるかと思いきや、実に愛らしく、シンプル。想像力が刺激され、頭でっかちな大人でも、子供のような自由な発想が出来そうだ。限られた色彩が落ち着きを生み、見ていて飽きない。基調となったターコイズブルーと黒の組み合わせは、個人的にツボである。(A.H)



(A.H & A.M)

🍏金のりんご賞 IDENTITY

No.1-4 わたしの街、あなたの街 マエヴァ・ルブリ

シリア内戦の戦火の中、身ごもったことを後悔するアニサ。しかし破壊された病院で出産したわが子を「あなたは天の光、地の光、戦火の子」と呼び、後にスイスへ亡命します。

作者マエヴァとはお互いの母親が助産師だったことから知り合い、アラビア語とフランス語を教え合うなか、アリサのシリア国内での生活、祖国喪失、自ら母となることを躊躇わずにはいられない過酷な現状、二重三重に自身の存在を問わざるを得ない悲しみと苦しみ。そして新たな希望や挑戦を記録します。

原画はフランス語で書かれます。多言語国家スイスらしく最初にドイツ語で次にフランス語で出版されました。フランス語とアラビア語が記された原画からは異なる国家・文化を理解するための言葉の持つ意義を感じます。戦火や出産の場面で使われる赤。青や紫に影を帯びたアニサの顔。新生児を包む光のような黄色。シンプルな構図の中に様々な色が効果的に使われてアニサの心の軌跡を表現しています。(S.N)

🍏金のりんご賞 INNER JOURNEY

No.1-8 一等車の旅 ダニ・トゥレン

戦争で家族も家もなくした少女クレメンティーナが安定した生活を得るため、結婚相手を見つけに一等車に乗り旅をします。

季節ごとに現れる裕福な求婚者たち。美術品に溢れた邸宅や広い庭園での散策。見事なタペストリーのかかる部屋での豪華な食事。

しかし、何か違う。車内の通路で、駅のホームで考えに耽るクレメンティーナ。そして彼女が見つけた答えは・・・。

晴れ晴れとした笑顔で汽車を運転するクレメンティーナ。そう彼女は運転士として自ら汗を流し働くこと、自由を選んだのです。

光と影の陰翳に富んだイラストレーション。美術史を学んだ後、映画監督やイラストレーションを学んだ作者らしいまるで映画のようなシーンが続きます。(S.N)



No.2-4 ともだちのいろ きくちちき

作者は北海道出身。大学で建築を専攻。卒業後、東京の専門学校でデザインを3年間勉強。グラフィックデザイナーとして就職。骨董市で100年前のフランスの絵本に出会い、絵本作家になったとか。

絵本に登場する主人公「犬のくろちゃん」は、作者が自宅で飼っている黒白の愛犬がモデル。「ともだちのカエルくんがやってきて、何色が好きときかれ、(カエルくんの色)緑とくろちゃんは答えた。カエルくんが喜ぶ。そして、くろちゃんも嬉しくなった」→次々とともだちがやってきて同じ質問をされる。最後に「何色が一番好き？」ときかれたくろちゃんは「ともだち色」と答える。みんなが嬉しくなって「みんなともだち色」と大喜びして、物語は終わる。アーノルド・ローベル作の絵本、三木卓訳、がまくんとカエルくんの幸せを聞いた「ふたりはともだち」を思い出した。(Ma.S)

No.2-6 がっこうにまにあわない ザ・キャビンカンパニー

友達と毎朝学校目がけてダッシュしていた私にとって、自分の「足」を頼りに駆け抜けるこの男の子の気持ちは、「そうだよね！」の連続。ちょっと南国を思わせる風景の中、大きな水たまりのワニは何だか昔なじみのように感じられるし、踏切の長い待ち時間に別の世界をちら見してしまう心地もどこか懐かしい。

「道が折りたたまれて一気に飛び越えられたらいいのに」と心底思いながら走ったあの日。子どもの頃の色鮮やかな感情と魔術的思考が、くっきりはっきりよみがえる。冒頭で宣言される、この子が学校に“8じまでにぜったいにいかなきゃいけない”わけは、さあ、何だろう？爽快な読後感、請け合います。(M.H)

No.2-6 がっこうにまにあわない ザ・キャビンカンパニー

絵本の各ページ一杯に迫力のある大画面がせまってきます。一目散に走る少年の緊張感あふれる表情と息使いが感じられます。少年はなぜこんなに慌てて走っているのでしょうか。次々と画面に登場する巨大なワニ、ぐにゃぐにゃまがる歩道橋、長い長い汽車などが少年の行く手を阻みます。読者をドキドキわくわくさせながら、最期のページにたどり着くとその理由がやっとわかりました。制限時間ギリギリに小学校に到着した少年が見たものは……。読者をアツといわせるその壮大な落ちに思わずほっこりします。作者の挑戦的な意気込みが感じられるお薦めの一冊です。展覧会には4枚の原画が展示されていますので、その迫力を実感ください。(Y.W)

No.2-7 EDNE junaida

ミヒャエル・エンデの『鏡のなかの鏡—迷宮—』の作品をもとに見開きに描かれた絵は、合わせ鏡のように同じに見えるが、どこかが違う。謎のような言葉とともに迷宮に入り込んだ摩訶不思議な世界が描かれ、怖いけれどもっと知りたいという気持ちになる。前から読んで後ろから読んで違和感がなく、始まりも終わりもない。

そして、絵の中のどこが違うのか？探すのも面白い。タイトルの『EDNE』を逆から読むと「ENDE(エンデ)」！まさにエンデに捧げる絵本であると気づいて嬉しくなる。原画では、繊細な筆致と色彩の鮮やかさに引き込まれる。エンデの世界を junaida が独自の感性で再現しているようだ。(Sh.K)

No.2 - 8 なきむしせいとく 沖縄戦にまきこまれた少年の物語 たじまゆきひこ

太平洋戦争末期、唯一の国内戦となった沖縄戦。4月1日から6月23日まで沖縄本島で激しい戦闘により、日・米両軍兵士、民間人合わせて約20万人が犠牲となりました。泣き虫で「なちぶー」と呼ばれる8歳の少年「せいとく」はこの3か月間の激しい戦闘の中、母を失い妹とも生き別れ、そして自身も左手を失います。恐怖と怒り、悲しみの中生き抜いた「なちぶー」せいとくは泣くこともなくなりました。やっと訪れた平和。しかし戦後の沖縄には米軍施設が本島面積の約15%を占めて作られています。高校生となったせいとくが反基地闘争に参加する場面で終わります。

自身も5歳の時大阪で米軍の機銃掃射から逃げた経験を持つ作者は、自然の美しさを描くだけでなく多くの軍事基地を持つ沖縄の苦しみを型絵染と深い色彩で描きます。

大人と子どもと一緒に考える本と作者は語ります。(S.N)

No.2 - 9 海のアトリエ 堀川理万子

1965年生まれの作者が、子どものころ習っていたお絵描きの先生をイメージしてつづった作品です。「ディテールの中に、絵でしか伝わらない物語のようなものが入り込むといいな」との作者の思いが結実して、すみからすみまで、たくさんの発見がちりばめられています。特別出品のタブロー《いちごの風景》も、よく見ると…。今回の展示で特におすすめなのが、ケースの中にあるラフです。「色をつける前の下書き」であるラフは、確かにモノクロ。でも無限の色を感じるのです。作者は描く段になって初めて色を考えるそうですが、頭の中にあるたくさんの色の可能性が投入されているから、究極の彩色のように見えるのかもしれませんが。(K.M.)



(K.N)